

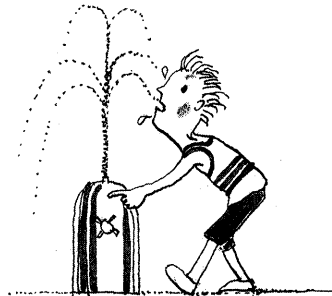
子どもたちの〈遊び場〉を考える

『子どもの遊び空間』 藤本浩之輔

『子どもとあそび―環境建築家の眼』

仙田満

小川 剛



日頃、学生たちと接していて感じられること

は、彼（女）たちは、概して自発性にとぼしく、人付き合いがわるく、したがって交友範囲がせまく、また日常生活での常識的なことに欠けるところが多いということである。これには、彼（女）たちの幼少期の生活にみられることが、影響を及

ぼしているといえよう。

このところ、受験体制の低齡化がすすみ、親の関心は子どもの学校での成績、一流校への合格に集中し、生活者として子どもを育てることがおろそかにされている。子どもたちも塾通いに時間を奪われ、周囲から過度に競争意識をあおり立てら

れ、本当の友だちを得ることなく幼少期を過ごし
てしまう。その上、都会地では、年々、子どもの
遊び場が減少し、子どもたちは「遊び」から遠ざ
かっていく。古くから、子どもにとって、遊びは
生命だとされてきた。遊びには、時間・場所・仲
間が不可欠である。しかし今、子どもたち自身、
またその周囲からこれらの三条件が失われ、生命
の源泉としての遊びが奪われている。そのことの
一端が、今、若者たちの生活と行動に表れてきて
いるのではないだろうか。長い目でみると、それ
はわが国の将来にとって由々しき事柄として表れ
てこよう。

子どもたちに「遊び」を取り戻すことは、現在
では、容易なことでないかもしれないが、焦眉の
事柄である。これをしていかなければ、創造性に
富むたくましい存在としての人間は育っていかな
いであろう。ともかく自分たちの手でやれること
から、そのことに取り組む必要がある。その際、

有力な手がかりを与えてくれるのが、つぎの二冊
の本である。

①藤本浩之輔『子どもの遊び空間』NHKブッ
クス、昭和四九年、日本放送出版協会

②仙田満『子どもとあそび―環境建築家の眼』岩
波新書、一九九二年

藤本氏は教育学者であり、仙田氏は建築家であ
る。それぞれの視座から、今日の子どもの「遊
び」、とくに「遊び空間」について、豊富な体
験、資料にもとづき、たいへんわかりやすく述べ
られている。

①は、出版年からもわかるように、経済成長・
都市化の進行のなかで、大都市で子どもの遊び場
が奪われはじめた時期に書かれたものであるが、
今なお読みつがれているものであり、まさに「古
典」というべき地位を占めている。本書が、この
ような永い生命を保ちつづけることができたの

は、その問題提起が子どもの遊びと成長との関係について本質的な洞察にもとづくものであり、かつまた具体的・実践的な内容をもつものだからである。

本書では、「遊び」は「人間が生きていく上で基礎になる能力、すなわち、社会的能力、創造力、運動能力や体力を獲得し、発達させていく上できわめて重要」というとらえ方が全体のライトモチーフとなっている。そして、戸外空間、施設空間、子どもの組織について、具体的な例を通して、その問題点が指摘され、解決のための手立てが示されている。最後に、大阪市のある小学校区での状況を通して、子どもの遊び場・遊びの変化とそれに対するものとしての児童館を中心とする地域の人びとの活動による遊び空間の復元の活動が示されている。得ることの多い本である。

②は、「環境建築家として、遊び環境研究者として、そして父親として、日ごろ考えていること

を朝日新聞の日曜版に『あそびの現風景』と題して連載した」ものを中心にまとめたものである。

私自身、興味深い写真とともに書かれたコラムを楽しみに読んだ記憶がある。全体的に要点をおさえたと読みやすいものである。表紙に巻かれている「帯」には、

「子どもたちに未来はあるのか あそびこそが創造性をはぐくむ しかし、いま子どもたちは、あそび時間、あそび空間、あそび友だちを奪われている」

と書かれている。問題意識では①と共通している。また具体的な例を通して論をすすめるという手法にも共通性がみられる。しかし建築家という立場から問題をとらえていくことから、さまざまな事物・現象を基本的な構成要素に還元し、全体的な構図や構造を見やすくしている点で、学ぶところが多い。例えば、「あそびの原風景」として、著者自身の体験をふまえながら、多くの子どもた

ちの遊び行動についての知見にもとづき、そのあそび空間・あそび場所を、「自然スペース」「オーブンスペース」「道スペース」を中心的な空間とし、また「アナキースペース」「アジトスペース」「遊具スペース」を従の空間とする六つの原空間によって成立するものとする。そしてそれぞれを類型化した遊びと関連させて、それぞれの空間の特質と相互関係とがあきらかにされる。これは子どもの遊び空間をみていく上できわめて示唆

的である。そのほか、Ⅱ 子どもの空間、Ⅲ 世界の子ども、Ⅳ あそび環境の現在、Ⅴ 子どもと大人、という五章からできた本であるが、楽しく読めて、学ぶところの多い本である。読んで「わかる」だけでなく、「わかった」ことを仲間と力を合わせて、行動に移していただきたいと思う。期待します。

(お茶の水女子大学)

『鳥獣戯語』

福音館書店 (八五〇〇円)

皆川 美恵子

夏休みの読書にふさわしい一冊の本を御紹介しましょう。動物の物語がどっさりと盛り込まれ

た、美しい図版もたっぷり添えられた、それはお洒落でリッチな大御馳走級の本です。内容がへ